

## 北海道大学附属図書館およびスラブ研究センター図書室のロシア地図コレクション

兎内勇津流



写真1

北海道大学スラブ研究センターは、ロシアを中心に、旧ソ連および東欧地域をその研究領域としている。図書室は、当該地域研究の基本的な資料の収集につとめてきたが、その中には地図資料も含まれる。

また、北海道大学附属図書館では、北方資料室および大型コレクションとして収集された資料を中心に、特色あるロシア地図コレクションが形成されている。

これらについては、雄松堂書店の広報媒体『ネットピヌス』誌上に一部を紹介させていただいたことがある（五七号、二〇〇四年）が、今回はそれを増補し、北海道大学附属図書館とスラブ研究センター図書室の所蔵するロシア地図の概観を試みたい。

写真2

ロシアにおける近代的測量術に基づく地図作成のはじまりは一八世紀である。それ以前に作成されたロシア図としては、たとえばジギスムント・フォン・ヘルベルシュタイン（一四八六―一五六六年）の『モスクワ国についての覚書』（*Bevum moscovitarum commentarii*）に掲載された図をあげることができる（写真1）。ヘルベルシュタインは、現在はスロヴェニア領内にあ

るヴィバヴァの出身で、ウィーン大学にまなび、その後神聖ローマ皇帝に仕え、一五七一年と一五二六年の二度にわたって、使節としてモスクワに派遣された。その旅行記は、ウィーンで一五四九年に出版されたが、たちまちドイツ語版とラテン語版の両方で何度も版を重ね、ロシア事情を西欧に広く紹介したのであった。北海道大学附属図書館は、バーゼルで一五五一年に出版されたそのラテン語版（資料番号017896340）、およびフランクフルトで出版されたそのドイツ語版（資料番号017896351）、その他現代の英訳版、露訳版等を数種類所蔵しており、そのロシア図を見ることができる。

シベリアの地図製作者として著名なセミヨン・ウリヤノヴィチ・レメゾフが一七世紀末に作成したシベリア地図は、残念ながらヘルベルシュタインのロシア図のように、同時代に印刷・出版されて広く流布するとはなかったが、ロシア政府がその支配領域を把握しつつあったプロセスを示す、貴重な史料である。

ロシア地図作成史の大家アレクセイ・ポ

ストニコフによれば、彼の製作した手書きの地図帳は三種残されている。ひとつは、ハーヴァード大学ヒュートン図書館に収められているもので、レオ・バグロフが解説を付けたファクシミリ版が出版されている（一九五八年刊。資料番号0025162408）。

もうひとつは、サンクト・ペテルブルクのロシア国立図書館手稿部の所蔵、最後のひとつ、Чертежная книга Сибири（一七〇一年）は、ロシア国立図書館手稿部に収蔵されているが、最近、二〇〇三年にモスクワで精巧な復刻版が出版され、スラブ研究センターにおいてもそれを見ることができる（資料番号1380027576。写真2）。

レメゾフが地図製作に励んだ時代は、ロシアの地図製作に測地学的方法が導入される直前のことであった。すなわち、皇帝ピョートル一世（在位一六八二―一七二五年）は、一七〇一年にモスクワ数学航海学校を、ついで一七一五年には海軍アカデミーを新首都サンクトペテルブルクに開設して測地学を学ばせ、やがて各地に測量隊を派遣して国土の測量をすすめた。一七二二年にはイヴァン・キリロヴィチ・キリーロ



写真5

本地図帳は、近代的測量術を適用して製作された最初のロシア全図であるが、シベリヤ（一六九五～一七三七年）が全国地図の製作・編集責任者となる。それゆえ、ポストニコフは、伝統的な方法で地図を仕上げたレメゾフの仕事について「白鳥の歌」と呼んでいる。

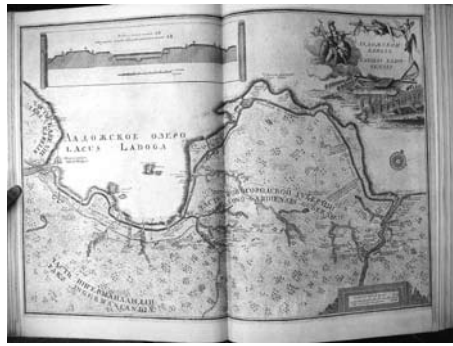


写真4

ジョートル一世時代に開始された、キリロフを中心とする全国地図の製作事業により、各地の測量が進んだ。これらをもとにして一七三三年には、一枚ものの全国地図がまとめられるが、その後一七四五年に、ロシア科学アカデミー版の地図帳として結実した。附属図書館北方資料室の所蔵する地図帳（*Russischer Atlas, welcher in einer General-Charte und neunzehn Special-Charten das gesamte russische Reich und dessen angrenzende Länder, nach den Regeln der Erd-Beschreibung und neuesten Observationen vorstellig macht*, サント・ペテルブルク、一七四五年）は、そのドイツ語版である（写真3）。なお、岩井憲幸によれば、明治大学図書館はそのドイツ語版とロシア語版の両方を所蔵し、また、天理図書館がドイツ語版を所蔵することである（「一七四五年ロシア帝室科学学士院刊『ロシア帝国地図帳』について」『窓』一一三号、二〇〇〇年）。また、さらに駒込の東洋文庫においても本地図帳を所蔵するとの情報があり、本地図帳は、国内に少なくとも五部存在するようだ。

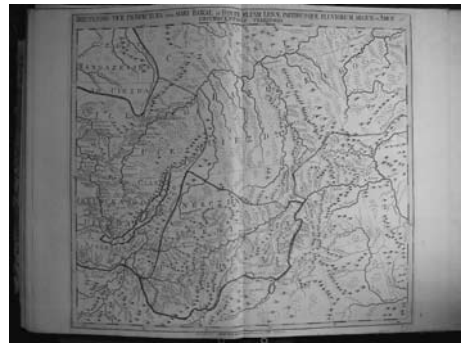


写真3

フ（一六九五～一七三七年）が全国地図の製作・編集責任者となる。それゆえ、ポストニコフは、伝統的な方法で地図を仕上げたレメゾフの仕事について「白鳥の歌」と呼んでいる。

ジョートル一世時代に開始された、キリロフを中心とする全国地図の製作事業により、各地の測量が進んだ。これらをもとにして一七三三年には、一枚ものの全国地図がまとめられるが、その後一七四五年に、ロシア科学アカデミー版の地図帳として結実した。附属図書館北方資料室の所蔵する地図帳（*Russischer Atlas, welcher in einer General-Charte und neunzehn Special-Charten das gesamte russische Reich und dessen angrenzende Länder, nach den Regeln der Erd-Beschreibung und neuesten Observationen vorstellig macht*, サント・ペテルブルク、一七四五年）は、そのドイツ語版である（写真3）。なお、岩井憲幸によれば、明治大学図書館はそのドイツ語版とロシア語版の両方を所蔵し、また、天理図書館がドイツ語版を所蔵することである（「一七四五年ロシア帝室科学学士院刊『ロシア帝国地図帳』について」『窓』一一三号、二〇〇〇年）。また、さらに駒込の東洋文庫においても本地図帳を所蔵するとの情報があり、本地図帳は、国内に少なくとも五部存在するようだ。

リア東部や極東地方など、辺境部には、まだ経緯度の測定が完了しない地点が多く残っていたことが窺われる。

さて、その後もロシアの地図作成事業は進行し、各県の詳細地図の作成が進められる一方で、科学アカデミーの探検隊による調査が行われた。附属図書館が平成一三年度大型コレクション経費によって購入したロシア地図帳は、一七七〇年代から一七八〇年代にかけて製作されたおおむね県単位のロシア地方図四九葉を所有者が自分で綴じ合わせた、ユニークなものである。県図の他、首都ペテルブルクや、ヴォルガ河口の都市アストラハンの図、かわったところでは、一八世紀にラドガ湖の南岸に沿って建設された運河の図が含まれている。ネヴァ川によって首都ペテルブルクと結ばれたラドガ湖はヴォルホフ川によって古都ノヴゴロトと結ばれるなど、古くから交通の要衝であった。湖岸にわざわざ運河を建設するのは、一見不可思議に思われるが、日本にも類似のケースがある。すなわち鈴木理生は、一五九〇年の徳川家康の江戸入城直後から、江戸と当時利根川河口のあった行徳を結ぶ、東京湾岸沿いの運河が建設されたことを指摘する（『幻の江戸百年』ちくまライブラリー五七、一九九一年、のち『江戸はこうして造られた』と改題してちくま学芸文庫、二〇〇〇年に収録）。この運河は、その後、東廻り回船航路の一部となり、明治中期まで舟運の大動脈として使

われたという。建設の理由について、鈴木は、手漕ぎ舟や小型帆船には、潮流が複雑な河口のある海岸線の横断は困難だったためと述べるが、ラドガ湖の運河建設もこれと同様に、水運の安全・安定を目的にしたものと考えられる。

そのラドガ湖岸運河の図および東シベリアのイルクーツク県の図（イヴァン・トルスコット製作、一七七六年）をご覧いただきたい（資料番号01738616、写真4、5）。

一八世紀末の一七九六年に、ロシア軍には参謀本部と同時に地図製作部が設けられ、翌一七九七年にはこれが「デボ・カルト」（Девон карт）と改称される。その編集した全一〇七枚より成る八四万分の一「ロシアおよび周辺地図」（Подробная карта Россійско и Империи близ лежащих заграницных владений）は、一八〇一年から一八〇四年にかけて製作された。おおむねシベリアを除いたロシアとその周辺部をカバーし、南はカフカス地方やブルガリアのソフィア、東は中央アジアのヒヴァやアラル海、西シベリアのトボリスク、西はポーランドのトルンやセルビアのベオグラードあたりまでを収める。今回は、ロシア・フィンランド境界付近の図をお見せしたい（写真6）。左下がフィンランド湾、右の湖がラドガ湖であり、その他無数の湖沼が見える。下端には辛うじてペテルブルクを認めることができる。ナポレ





写真 8



写真 7



写真 6

オン戦争の時代には、このような地図が利用されていたのである。

附属図書館北方資料室には、この他さらに、一八三三年発行の地図帳『ロシア帝国、ポーランド王国およびフィンランド大公国地図帳』（*Географический и статистический атлас Российской Империи, Царства Польского и Великого Княжества Финляндского, расположенный по губерниям*）を所蔵する（資料番号01706288）。四一×五二センチメートルという横長の版型に印刷されたこの地図帳は、繊細なタッチで手彩色が施された美本である。一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて獲得した領土であるポーランド、フィンランド、ベッサラビア、カフカスも収録されており、帝政ロシア政府が、その国土を相当具体的に把握するようになった状況を想像させる（写真7）。

これより九〇年余が経過した一九一四年、ロシア政府の土地整理・農業総局は、シベリア鉄道の開通とともに急速に進行しつつあったシベリア、中央アジアの植民の状況を詳細に調査し、三巻本『アジア・ロシア』（*Азиатская Россия*）を刊行した。この付録地図帳（一九一四年刊）は、多色刷りを駆使した大冊で、当該地域の状況を、地勢はもとより、土壌、気候、民族、土地利用、交通など、非常に多面的かつ具体的に示すもので、帝政末期の当該地域の状況

を調べる上で非常に有用なツールである（資料番号137008210、写真8）。

この他、スラブ研究センターには、一九六〇年代から八〇年前後までに製作されたソ連邦二〇万分の一地図全四五〇四枚、および同様に製作された、同じく二〇万分の中国東北部、朝鮮半島、内蒙古地域の地図四三〇枚も所蔵する。なお、この地図は、岐阜県立図書館、早稲田大学図書館およびアジア経済研究所図書館でもその大方を所蔵するようである。

さらに、スラブ研究センターには、ペテルブルクのマルクス出版社製一九〇五年版の『机上版世界大地図帳』（*Большой всемирный настольный атлас Маркса*）がある（資料番号13259801）。おそらく当時はそれなりの部数が製作されたもので、特に稀少とは言えないかもしれないが、当時の世界各地のロシア語表記を調べる際には重宝している。

附属図書館には、また、ロシアが北太平洋地域を測量して作成した地図『ベーリング海峡よりコリエンテス岬までのアメリカ北西沿岸、およびアレウト諸島地図帳』（*Атлас Севернозападных берегов Америки от Берингова пролива до мыса Корриентес и Островов Алеутских*、一八五二年刊）の複製版を所蔵する。一八世紀末から一九世紀の前半にかけて、北太平洋では、ロシア、スペイン、イギリス、アメリカの

各国が拮抗する状況があった。このうちロシアは、一七世紀前半にはシベリアを横断して太平洋岸への進出を果たしていたが、毛皮を追ってアレウト諸島に進出し、一七九九年には露米会社を設立し、現在のシトカに根拠地を建設してアメリカ大陸北西岸を手中に収めた。しかし、その後経営不振に陥り、一八六七年に領土をアメリカ合衆国に譲渡し、会社を解散した。

本セットは、アムール河口、オホーツク周辺から千島列島、カムチャッカを経て、アレウト諸島まで、およびベーリング海峡から現在ではメキシコ領であるカリフォルニア湾入口までのアメリカ大陸西岸をカバーする両面印刷された一九枚の一枚ものの地図から成り、露米会社の勢力が及んでいた当時の状況を知る手がかりとなる（原本は地図帳として綴じられていたはずだが、本複製版においては、利用の便と制作上の都合であろう、一枚物として、全体を箱に収めている。資料番号1370023470他）。

このほか、北海道大学附属図書館およびスラブ研究センター図書室は、地誌や旅行記をはじめとして、前述ポストニコフ、バグログ等の地図製作史研究等、関連資料を豊富に所蔵し、国内はもちろん海外からも多くの研究者の訪問を受けている。

（とない ゆづる／北海道大学スラブ研究センター助教授）